

# 蛭間芳樹さん

(ホームレスサッカー日本代表監督)

## ホームレスとは誰か？

四年に一度のワールドカップサッカー。スポーツ界最大のイベントで、巨額のマネーが動く。その一方で、二〇〇三年から毎年、ホームレスの人たちだけが一生に一度だけ参加することができるW杯も開催されている。日本代表のニックネームは「野武士ジャパン」。監督の蛭間さんに聞いた。

## ホームレスサッカーとの遭遇

——なぜホームレスサッカー日本代表である野武士ジャパンに関わるようになったんでしょうか。

それが偶然……いえ奇跡みたいなもんです。

ホームレスがサッカーをしていることも、ましてや世界中のホームレスのサッカーチームによるW杯があるなんて知りませんでした。ホームレスに対して、こんなに豊かな日本でホームレスなんて、ただ彼らの努力が足りないからだと思っていた。いまに

して思えば、当時の私は思考停止していたんです。

ホームレスとの出会いは、社会人一年目の二〇〇九年。当時、私は一橋大学の米倉誠一郎教授が塾長の「一人一人が元気でいなければ、国が元気になるわけがない」という理念のもとに開かれる「日本元氣塾」で二年間勉強していて、カリキュラムの一環でホームレスが自身の自立のために自ら販売する雑誌『BIG ISSUE』の販売サポートを行なったんです。そのときに知り合ったホームレスの方が声をかけてくれたんです。「次の土曜日、サッカーするから来る？」。私の人生を変えた言葉でした。

——高校時代までプロ選手を夢見てサッカーに取り組んでいたそうですね。

私は小学四年生のときのJリーグ開幕に衝撃を受けて、三浦知良選手と一緒に日本代表でサッカーをすることを夢にサッカーを始めました。学校が終わると、グラウンドでボールを蹴り、雨や雪が降ったら友達たちの家が集まってプレイステーションのサッカーゲーム「ウイニングイレブン」をやる。試合で勝ったり負けたり、練習で怒られたり……。さまざまな経験を通して自分の価値観が形成された。サッカーがない生活はありえないと言っているほどのめり込みました。

小中高と地域の選抜チームやユースチームに所属し、プロを目指したのですが、高校時代のケガが原因でプロになる夢は断たれてしまった。それでもサッカーから離れられなかった。見る側としても、少年サッカーの指導者としても、ずっと関わってきました。サッカーは私の原体験、原点だったと言ってもいいほどのスポーツなんです。

——ホームレスサッカーと聞いたときはどんな印象でしたか？

正直、理解できませんでした(笑)。ホームレス、サッカー、W杯、日本代表……。すべてがバラバラで結びつかなかった。二つの違和感がありました。サッカーを続けてきた人間にとって日本代表のステータスはそのすごいものがある。まずサッカーに携わっている者としての違和感、どうせ遊びのサークル活動だろう、と。もう一つが、日本の一般的な教育を受けた人間が持つホームレスに対する先入観からくる違和感。怖い、怠け者、くさい……。みんな口には出さないだけでそんなイメージを持っている。私もそうでした。まあ、実際に臭う人もいるから、くさいのはイメージだけじゃありません(笑)。



●ひるま・よしき 1983年、埼玉県生まれ。日本政策投資銀行 環境・CSR部 BCM格付主幹。世界経済フォーラムが選ぶ「ヤング・グローバル・リーダーズ2015」に選出されている。著書に『ホームレス・ワールドカップ日本代表のあきらめない力』(PHP研究所)、『日本最悪のシナリオ 9つの死角』(新潮社/共著)など。